

◆三田評論と昭和一〇〇年

## 思想上の独立

本塾大学医学部の加藤元一<sup>かとうげんいち</sup>博士は、其発見に係る「不減衰伝導」の新学説を提げて、過般ストックホルムの万国生理学大会に出席せられ、今其話を学生諸君は聴かれたのでありますが、其加藤博士の新学説発見に関連し、丁度好い機会であるから、思想上の独立と云う事に就て、少しく述べて見たい。

思想上の独立、それは理義極めて簡單明瞭なものである。殊に独立自尊の大主義の下に養われて居る吾々に於ては、平生よりしてお互に十分に其事を心得て居る。敢て事新らしく言うまでもないのである。さりながら加藤博士が従来<sup>しゆらい</sup>の定説を破つて新学説を発見したと云うことは、即ち思想上の独立の最も光輝ある新実例である。故に此機会に此題目に就て御話するのは、寧ろ相応しい事と考える。

神経の伝導学説云々のことに就ては、私は勿論門外漢で

あつて、何等の知識もない。けれども兎に角世界の生理学會に於て長く定説として認められ、欧米至る所の学者皆之を金科玉条として守つて居つた其学説を敢て漫りに盲信せず、自由批判の俎上に上して種々研究を遂げ、遂に其の誤れることを発見し、減衰伝導とは反対に、所謂不減衰伝導が即ち真理であると云う所に結論が到達し、生理学上に革命を惹起し、全世界の学者を驚倒せしめた。是れは實に學問上の独立、思想上の独立そのものを現わして居るのである。欧米学者の糟粕<sup>そうぼく</sup>を嘗めて、唯々其受売をするとか、其真似事ばかり言つて居るのは大に異なり、彼等の学説の支配の外に立ち、それを打ち破つて一つの革命を學問上に起したと云う、如何にも我日本の学会の名譽であり、又慶應義塾大学の名譽でもあり、近來の一大快事である。

さて新学説の発見などと云えば、むずかしい特殊の問題

林 <sup>はやし</sup>  
毅 <sup>さき</sup>陸 <sup>りく</sup>  
(塾長)

の如く見ゆるも、併し思想上の独立の尊むべきは、何人にも於ても同様である。特に学問に従事するものは、常に此点に注意せねばならぬ。思想上に於て、徒に他の捉わるる所とならず、大学者の説なればとて、之れを盲信せず、流行の議論なればとて、之れにかぶるることなく、常に独立の立場に立つて自らの境地を開いて行くと云う、それだけの見識は皆無くてはならぬ。国に於ては食料の独立と云うようなことを云う。又武器の独立或は石油の独立と云うようなことを云う。そう云う国家生存上の必需品に就ての独立論があるが、就中思想の独立は、個人としても亦国家としても、最も尊く又最も必要なものである。

日本人にして若し或外国の思想の奴隷となり、己の精神的独立を失つてしまふと云うことであつたならば、国家のためはより危険なことではない。又是より恥すべきことではない。昔徳川時代に山崎闇斎と云う儒者の有名な話がある。漢学の大先生たる闇斎は、或時門弟等に問うて曰く『若し支那の方で孔子を大将と為し孟子が副将と為り、数万の兵を率いて我国に攻めて来ると云うことがあつたならば、我党孔孟の道を学ぶ者は如何にすべきであらうか。』

斯う云うことを弟子共に尋ねた。処が大勢の弟子共それに対し答える所を知らず、予て崇拜する大聖人大先生の孔孟が轡を並べてやつて来ると云う場合には、進退甚だ迷わざるを得ずとて、何とも返答することが出来なかつた。

そこで闇斎は口を開き、『若しそう云う場合が起つたならば、我々は身には堅い鎧を着、手には鋭い武器を執り、彼等と一戦を交えて孔孟を生捕り、以て国恩に報ゆべし、此れが即ち孔孟の道である』と告げたるに、弟子共は始めて『成程そう云うものでございませうか』と言つて感心したと云う。闇斎に教えられる迄、それが分らぬとは、実に馬鹿氣た驚いた話である。如何に孔子を崇拜すればとて、其教に心酔する余り、其孔孟が大将となつて攻めて来て我国家の存立を脅す場合に、是と一戦を交える勇氣がないと云うは、沙汰の限りと謂わざるを得ない。

そこで福澤先生は此話を評して、『道を学んで之に心酔するは学ばざるの優れるに如かず』と喝破して居られる。(時事小言) 孔孟の教にせよ、欧州大学者の教にせよ、世間流行の主義学説にせよ、それを学んで之に心酔し、精神上の奴隷となるが如きは、最も笑うべき事である。若し思想上の独立を失うようなことであるならば、寧ろ学ばない方が宜しい。無学寧ろ幸である。例えば酒を呑む。一杯二杯は人が酒を呑むも、三杯四杯と重ねる中に酒が人を呑む。酒に呑まれるとなれば、弊害特に大ならざるを得ない。本人は陶酔気分になつて大いに愉快を感ずるのであるが、次第に神経は麻痺し身体の働きが自由に出来なくなる。其極はアルコール中毒にて、中風のヨイヨイになつてしまふ。学問に於ても然り。思想上の独立に注意せず、無

批判的に人の言う所を盲信し、それに心酔するは、酒に呑まるるようなものであつて、其陶醉して居る本人は何だか氣持が好く、愉快であるかも知れないが、何ぞ凶らん其間に智力が衰えて来る。脳髓の判断力が麻痺して来る。そうして福澤先生の言われる通り『学ばざるの優れるに如かず』と言わざるを得ないような状態になる。是は大に考えねばならぬ事である。

一体日本は西洋文明を模倣して今日に至つた。此模倣と云うことは文明の發達を速かならしめた効能もあるし、強いて非難すべきでもない。さりながら余りに模倣に努めて来た其為に、何でも外から新しい物が這入つて来れば、それが一番良い物だと考えるようになって来た。自分の家にある古い物は皆宜しくくない。外から新しい物を取入れて来る。それが一番立派なものである。斯う唯々訳もなく思ふような傾向が出来て来た。新しきものは即ち真理なりと軽々しく考へるような癖が付いて来た。福澤先生は明治初年の頃に於て『旧を信ずるの信を以て新を信じ、昔日は人心の信、東に在りしもの、今日は其処を移して西に轉じたるのみにして、其信疑の取捨如何に至ては、果しての當の明あるを保す可らず』とて、新物盲信の旧物盲信と同様に非なることを指摘せられたことがある。今日に於て、新物盲信の弊、寧ろ更に甚しきものあるは、遺憾至極である。

要するに右の如くにして、一般に自分の持つものに対す

る自信と云うものがない。是は歐羅巴で流行つて居る學説である。是は亞米利加で唱えられて居る意見である。是は独逸の何々學者の説である。そう言へば直ちに其前には無條件に兜を脱いで心酔しようとする。是は山崎闇齋の門生等が孔孟の教に心酔したると何等扱ふ所がない。

如何なる聖人哲人であろうとも、其言う所を無條件で取り入れ、盲目的に之を信じ、それに心酔して思想上の奴隷となるは、吾々断じて賛成することが出来ない。況んや聖哲の名に値いせざる、そして幾多の欠点を有する學者思想家の言うことを、軽々に盲信し、其心酔者となるは、余りに意氣地のないことだと言わざるを得ない。敢て偏狹を可とするのではない。広く智識を世界に求める。無論吾々は之を努めねばならぬ。而して一切の新智識新學説に対し、常に敬虔の態度を以て之を迎えねばならぬ。そうして一切のものを吾々の参考と爲し、我知見を磨くの資と爲さねばならぬ。要は自由批判の態度を飽迄も保持し、輕信盲従の愚を戒むるにある。

人間は実は弱いものであつて、世間の流行と云えば、一種の魔力を感じ易い。併し其流行なるものは、実は大して權威のあるものではない。例えば西洋に於て、女の著物の裾が或時は長く、或時は非常に短くなる。或時は胸を隠し、或時は胸を現わすのが流行る。何の為にそれが流行るのか、別に理屈はない。唯々時々變つた目新しいものが流

行ると云うに過ぎない。思想言論界の流行にも、稍せうそれに類するものがある。其の意見が一種變つて居り、目新しいと云う為に、それが注意を引いて、流行の種を作る。そうしてそれが如何にも興味を唆り、一寸偉いものの如くにも見える。無論流行とあれば、それを取つて調べて見るも宜しい。目新しいものが現るるならば、それを研究するは宜しい。さりながら欧米の女が裾を短くして足を出して居るからと言つて、日本の女が皆足を出さねばならぬと云う理屈はない。向うで女の礼装は半身を露出し、半裸体の有様となつて居る、だから日本の淑女も皆其真似をせねばならぬと限つたことはない。思想上の問題に於ても、海外の流行なるものを参考と為すは可なるも、直に輕信の弊に墮し、又雜誌等を賑わす一時の氣まぐれの流行にかぶるるが如きは、大いに戒むべきである。衣装風俗上の事柄に於ても、徒に流行を追つて輕浮な真似をするのは、褒めた話ではない。況まして思想上學問上の事柄に於て、何等の自信なく本領なく、流行の風に吹かれて、西に東に浮遊妄動するは、醜態の最も甚しきものである。

世間ではよく危険思想と云う。併し所謂危険思想其者は左程危険なのではない。所謂危険思想なるものに対する態度の宜しきを得ないことが、危険を生むのである。苟いふも思想上の独立を失わないで居るならば、何物が来るとも恐るることはない。共產主義又は過激主義等に対し、思想上

の独立を失つて直ちに其心酔者となると云う其輕卒な且無氣力なる態度が、実に危険なのである。地球上より酒を葬り去ることは不可能である。酒に呑まれないだけの心掛があれば、先づ以て安全である。社会より詭激背理の思想を根絶せしむことは不可能である。輕々しくそれに心酔せぬだけの心掛があれば敢て憂うるに足りない。従つて今日最も排斥すべきは、卑屈輕信の惡風であり、鵜呑み無批判の陋習である。又今日最も奨励すべきは、自主的討究の精神であり、独立的批判の氣概である。人間の品位の為に、學徒の面目の為に、學問其者の進歩の為に、並に又国家社会の安寧隆昌の為に、呉々も思想上の独立に注意せんことを希望する。(於三田演説會)

【一九二七(昭和二)年一月号(三五三号)掲載】

(林は塾長(一九二三〜一九三三)。在任中の功績に日吉キャンパスの開設計画がある。本講演は、医学部教授の生理學者、加藤元一が「不滅衰伝導學說」を打ち立て世界的に高い評価を受けた後、義塾で行つた加藤の講演に際してのもの。加藤の業績を称揚しつつ、學問上の独立、思想上の独立の重要性を語る。)